

日本シェリー研究センター第26回大会

日時：平成29(2017)年12月2日(土) 12:40 受付

場所：東京大学 本郷キャンパス 山上会館 2階 大会議室

プログラム

1. 13:00 開会の辞 会長 阿部 美春

2. 13:05 特別講演 吉岡 丕展

Ode to Liberty を読む——A Reading of Shelley's *Ode to Liberty*

3. 14:20 日本シェリー研究センター シンポジウム

The Scientific Shelleys——「Shelley+Mary+科学」の新たな解答

司会 新名 ますみ

パネリスト I 米田ローレンス正和

「アイデア」と「プリンキピア」の交錯——シェリーにおける「自然」の表象

パネリスト II 鈴木 里奈

Frankenstein に見る自然科学と決定論

パネリスト III 宇木 権一

The Tempest of the Shelleys——A Wind of Lucretius' Atomism——

レスポンス 新名 ますみ

新たなる調和と対立へ

4. 16:30 年次総会 昨年度分会計報告・その他

17:30 より山上会館地下1階会議室001にて懇親会(会費4,000円)を開きます。是非ご参加ください。

事務局からのご連絡

*今年度分(2017年)の会費未納の方は受付にてお支払いください。

*会場使用料の一部負担金として、参加者お一人500円を頂戴いたします。

特別講演

Ode to Liberty を読む

A Reading of Shelley's *Ode to Liberty*

吉岡 丕展

The first and last stanzas of *Ode to Liberty* serve as prologue and epilogue for the rest, stanzas II - XVIII. The prologue summarizes each stanza (or stanzas) of the body, which, like an episode in an epic or a scene in a drama, repeats and enlarges the prologue, and some allude to other writings, e.g., XIII which in turn is enlarged by "Liberty" written in Shelley's notebook in the same year as *Ode to Liberty*. There "The fiery mountains answer each other, / Their thunderings are echoed from zone to zone; / ...And the ice-rocks are shaken round winter's throne / When the clarion of the Typhoon is blown / ..." "Earthquake is trampling gone city [London] to ashes, / A hundred [e.g. Vienna and Berlin] are shuddering and tottering; the sound / Bellowing under the ground!" "The clarion of the Typhoon" alludes to *Prometheus Bound* by Aeschylus included e.g. in The Loeb Classical Library: ll. 197-241; 340-376; 1007-1035; 1080-1093". There Typhon together with Titans, has from age to age been rising from below the mother earth in a war cry "against the Gods", while the latter with his thunderbolt has struck the Giants dead every time they ascend toward heaven. They first rose against Cronus after a debate among themselves as to whether to obey or resist him and his family.

I prepare a handout for audience and read it, interrupting the reading occasionally with Japanese comments.

(よしおか・もとのぶ)

シンポジウム

The Scientific Shelleys

「Shelley + Mary + 科学」の新たな解答

司会 新名 ますみ

Percy Bysshe Shelley と科学という関係は、長く研究されてきた題材である。Carl Grabo がいみじくも彼を "a Newton among poets" と表現してから一世紀近くが経つ。Shelley が当時花開き始めた近代科学に心酔し、作品中に積極的に取り入れたことは、今さら語る必要もないだろう。当時の科学の何が彼の作品のどの部分に反映され、それがどのように詩と調和したかということも、十分に研究されてきたと言える。片や Mary Shelley においても、*Frankenstein* の中で科学の暴走という危険性に着目し、それが現代への警鐘となっているという解釈は、周知のものである。

それでは、二十一世紀初頭に生きる我々が、さらに彼らと科学について語る意味とは何であろうか。現在、科学はますます進歩し、人は遺伝子の領域までに踏み込み、Mary の描いた生命創造までを予見させるような段階に至っている。人間が自分の存在意義を見失いそうなこの時代にあつて、我々がなすべきことは何であろうか。改めて Mary の予言に怯えることか。それとも、Shelley が作品の中でなし得た調和に見習い、精神世界と科学を融合することなのか。

ここで思い至らなければならないのは、Shelley たちの時代においては、科学が今とは違う意義を持って存在していたという事実である。当時、科学はまだ未発達で未分化の状態にあり、それゆえ人々は科学に対してはるかに無邪気であった。次々となされる発見や証明が世界をよりよい方向に導いてくれることに、現代より疑いを持っていなかった。科学に対するこの無垢な信奉こそが、Shelley に詩と科学を調和させたのだとしたら、現代の我々は彼の詩作の価値を減ずるべきだろうか。またその一方で、無邪気な時代にあつてなお科学の危険性を察知した Mary を、予言者として褒め称えるべきなのだろうか。

その答えを得ることこそが、彼らと科学の関係を研究し続けていく意義の一つと言えるだろう。Shelley と Mary の姿勢が時代精神に左右されているのだとすれば、何にも限定されない普遍的な価値はどこにあるのか。科学全盛の現代が抱える不安にも耐えうる、科学との恒久的な関係は二人の中に見いだせるのか。それを探るためには、科学を扱う上での視野を広げ、様々な方向から検討して

いくことが必要となる。彼らの時代に局限しない科学の概念を得ること、個人対科学という関係だけに留まらず広く比較していくこと、更には科学の定義そのものでさえも問い直すという段階を踏まねばならないだろう。

その視野の広がりや考慮して、シンポジウムには三人のパネリストをお招きした。米田ローレンス正和氏には Shelley を中心に、鈴木里奈氏には Mary を中心に、そして、宇木権一氏には科学者としての立場から言及していただく予定である。視点を三点にすることで、Shelley と科学、Mary と科学という一対一の関係だけではない視点が生まれることを期待したい。いわばお三方に三角形を構成していただき、その三つの頂点の相互作用から、無邪気な科学信奉者 Shelley でもなく、単なる予言者 Mary でもない普遍的な存在意義を探っていきたいと思う。最後にフロアとのやり取りを通して三角形の上に三角錐が築かれ、その頂点が求めた答えの一部でもなせば幸いである。

(にいな・ますみ：慶應義塾大学)

「アイデア」と「プリンキピア」の交錯

——シェリーにおける「自然」の表象

パネリスト I 米田ローレンス正和

Percy Shelley の科学言説がそれ自体で研究対象として成立するようになったのは、ロマン主義研究において「歴史化 (historicisation)」が始まった 1980 年代以降である。Shelley 研究における「歴史化」の先駆者となった Timothy Morton は、*Shelley and the Revolution in Taste* (1994) において、Shelley が生涯を通じて実践し続けた「菜食主義 (vegetarianism)」は単なる個人の性癖ではなく、革命期ヨーロッパの食文化において広く見られる現象であったことを明らかにした。同様に「歴史化」を標榜した Sharon Ruston は、*Shelley and Vitality* (2005) において Shelley の医学言説を分析し、彼の作品において描かれる「生物 (organism)」のイメージが同時代イギリスの医学の定義する「生命 (vitality)」の本質と一致していることを証明した。実に、長らく等閑に付されてきた Shelley の科学言説は、「歴史化」という批評的営為を通じて、ロマン主義時代の社会的・文化的コンテクストへと組み込まれるに至ったのである。

しかし、Shelley の科学言説を歴史化するコンテクストはロマン主義時代のイギリスに限らない。18 世紀後半から 19 世紀前半にかけてのヨーロッパでは、「第二次科学

革命 (the Second Scientific Revolution)」が進行していた。古典形而上学に基づいて森羅万象の本質を探究する「自然哲学 (natural philosophy)」は、啓蒙思想の興隆と市民社会の発達を通じて徐々に実証的な学問へと——すなわち、物理世界の因果関係を分析・記述する「自然科学 (natural science)」へと変容する途上にあつた。本発表では、「第二次科学革命」の時代に Shelley の科学言説における「自然」がどのように表象されているか詳細に分析する。

(よねた・ローレンス・まさかず：白百合女子大学)

Frankenstein に見る自然科学と決定論

パネリスト II 鈴木 里奈

啓蒙思想が全盛に達した 18 世紀後半のヨーロッパにおいて、自然科学の進歩は人間の悟性の無限の可能性を証明するものであつた。急進的社会思想家である William Godwin にとって、科学とは、*Political Justice* (1793) において展開した、啓蒙による人間の無限の進歩・改善の可能性、すなわち、「完全可能性 (perfectibility)」論を支えるものであり、また、森羅万象が物理的因果の法則に支配されているとする「決定論 (necessitarianism)」の土台でもあつた。

自然科学は観察や分類、例外の排除といったアプローチによって、自然界を支配する「必然の法則 (the law of necessity)」を明らかにする。その進歩は、これまで偶然や超自然、奇跡と捉えられてきた事象を徐々に消滅させ、森羅万象から神の存在を切り離していく。Godwin は、科学的アプローチによって、人間の精神の働きをも根本原理へと整理することができるとし、それが自然科学の役割であると考えた。科学的手法によって、精神と道徳の世界における「必然の法則」を見つけ、人間の心の作用の規則性・因果性を把握することができれば、人間はそれを応用することでさらに意識的、理性的な存在となる。

Frankenstein (1818) の世界も「必然の法則」に支配されている。Mary Shelley はそれを自然界の事象の連鎖に、また Victor と被造物の精神の作用の連鎖の中に描き出す。しかし、その必然の連鎖は人間の無限の進歩に繋がるものではない。物語を取り巻く必然の連鎖は、Godwin が「不規則な事象」や「偶然」と呼ぶ予測不可能な出来事や心の作用によって不意に、そして繰り返し、転換させられる。Mary が描く世界を支配する法則は、決して科学的アプローチで解明されるものではない。Mary は、自然科学を土台とする唯物論的必然に人間の精神の作用を把握、やがてコントロールさせようとする試みの限界を提示している。それは近代科学者 Victor が、自然科学を駆使し

て生命の法則を暴いた結果生み出す怪物と悲劇に投影されている。

本発表では、*Frankenstein* が、自然科学に人間の精神と道徳の世界を支配する力を与えようとした Godwin の急進的哲学への警鐘の物語であり、理性の批判的考察に耐えられるものだけを真理とし、森羅万象から神の存在と力を切り離そうとした合理的科学への警鐘の物語であることを論じ、それを Mary の宗教観に発展させていきたい。

(すずき・りな：同志社女子大学)

The Tempest of the Shelleys —A Wind of Lucretius' Atomism—

パネリスト III 宇木 権一

Shelley と Mary が生きた時代は、Boyle や Newton 等が築いた近代原子論の基礎の上に Laplace, Lavoisier や Davy, Faraday が活躍し、思弁的な Natural Philosophy が実用的な Science へと急速に発展した時代である。

この発展の背後には、原子論復活の契機となった、600 年前 Poggio Bracciolini が再発見した科学詩 *De Rerum Natura* があった。

この詩は、古代ギリシャの Democritus や Epicurus 等の原子論を人々に啓蒙するために古代ローマの Lucretius が書いたものであり、2000 年以上前に科学的原子論を考察した先見性に注目が集まる事が多い。しかし、現在の科学書から大きく逸脱する部分も多く、特に詩の形式と Clinamen の概念の二点が挙げられる。

本発表では、この二点の逸脱を中心に、Lucretius への引用も多く決定論的思想の強い Shelley の *Queen Mab* と、原子論的発想による生命創造を描いた Mary の *Frankenstein* を取り上げて、その影響を考察する。

一点目の逸脱は、科学と親和性の低い詩の形式を取っている事である。

これには、人々に身近な詩の形を取る事で原子論を広める意図があり、その詩の美しさは Vergilius にも影響を与えたほどである。現代的観点では対立する様に見える詩と科学が調和した作品と言えるだろう。

科学的哲学的な主題を詩で表現する方法は、“A Philosophical Poem” の副題を持つ *Queen Mab* にも引き継がれ、また後の *A Defence of Poetry* における詩と科学の調和の理想にも影響を与えている。

一方、科学的知識を基礎として哲学的なテーマを追究し、散文と詩の違いはあるが簡素な言葉でまとめる点では、Science Fiction 的とも言える。その点で、SF の元祖と

称される *Frankenstein* とも類似しており、作中で描かれる Monster と Victor の対立は詩と科学の調和に対する影とも捉えられるだろう。

二点目は原子の微小な偏移 Clinamen の存在である。全てが原子から構成され自然法則に従う原子論を突き詰めると、Laplace's Demon に類される決定論や生命を Automaton と見なす様な自由意志への否定へと行き着く。現に、Epicurus の師である Democritus も決定論的立場を取っていた。

しかし、Epicurus 及び Lucretius は、Clinamen の概念を用いて決定論を退けた。彼らは、わずかな原子のずれにより原子同士が衝突して様々な自然現象が発生し、ひいては決定論から逸脱する生命の意志が生まれると考えたのである。例えば、一陣の風による原子のずれが Tempest さえも巻き起こすのである。この概念により、自然法則に従う原子論と自由意志が両立する非決定論的科学が成立する。

Queen Mab では、Godwin の Necessity 等の影響も受けた科学的決定論を主軸にしながらも、意志の自由を描く点が矛盾であると指摘されているが、Clinamen の存在によって両立可能である。

Frankenstein においては、原子論的な Monster の創造過程よりも、Creator が定めた運命から逸脱する Monster の反逆が中心に描かれており、Clinamen から生じる Tempest の物語と言えるだろう。

Lucretius の *De Rerum Natura* 再発見から 600 年の節目に当たるシンポジウムを通して、Shelleys 研究のみならず、現在、深刻化している詩と科学の二つの文化の対立における新たな観点が生まれる事を期待したい。

(うき・けんいち：物理系技術者)

レスポンス

新たなる調和と対立へ

新名 ますみ